

全国大学史資料協議会2015年度 総会・全国研究会について

橋 爪 麻 衣

2015年は、日本が敗戦を受け入れた日から70年の節目ということで、日本中が太平洋戦争に関する話題で埋め尽くされていた感がある。全国大学史資料協議会もその例にもれず、前年度から全国研究会のテーマは「戦後70年」絡みになるだろうと予測されていた。

ここ数年、太平洋戦争を経験した大学では、学徒出陣に関する調査が盛んにおこなわれている。戦地に赴くことを免除されるはずだった大学生たちが、まともに戦闘訓練も受けないまま激戦地へ駆り出されるようになった。大学によっては、学生たちを積極的に戦地へ送り出した側面もあり、今その自省がなされている。

今回の全国大会では、戦争の記憶を薄めてしまわないようにするにはこれからどうすればいいのか、という、伏線のような問いかけがあったように思う。紙やモノの資料の劣化、戦争を知る世代の高齢化に伴う聞き取り調査等の困難、戦争を知らない世代に対し、リアリティを失ったり美化したりしないように戦争を伝える方法の模索、様々な話題があったが、あの戦争の記憶は、純粹に「記録を残して伝えていく」ことの大切さを感じさせるテーマのようだ。

全国大会の東北での開催は、1997年以来である。今回は、仙台の二つの大学による共催であった。東北大学は、仙台の空襲の際に、奇跡的に被害を免れた。戦後学舎の移転も経験していないので、落ち着いたたたずまいを校内が保っている印象だ。東北学院大学は、歴史あるキリスト教系の学校というイメージが強く、こちらもキャンパス移転を経験していないが、学内の雰囲気は意外と「今風」だったように思う。

1日目（2015年10月7日）の会場は東北大学であった。宮城学院女子大学

教授の大平聡氏より、学徒動員に関する資料調査を自校史教育に取り入れているお話をうかがった。宮城学院女子大学の前身、宮城高等女学校は、非常に多くの学生を学徒動員に送り出している。当時、女子の動員は県内の場合が圧倒的に多い中、横須賀で働いた者も多くいたという。戦争が激しくなる中、キリスト教の授業を禁じられ、礼拝の前に国旗の掲揚を強制された女学校は、生き残るために「積極的に」学生を学徒動員に参加させた。ミッションスクールであるが故に、結果的に戦争協力をするようになってしまったのだった。かつて日本聖公会も、礼拝の際に天皇と皇室の繁栄と日本軍の勝利を祈る文言を積極的に採用した（現在それを「反省」する立場を取っている）。日本のキリスト教界に共通の、苦い記憶である。後半は、小学校の資料を調査をされている話をうかがった。学徒動員に関する調査が進むうち、歴史のある小学校には、教職員もよく知らないような業務資料（日誌等）が残されている場合があることがわかってきた。氏の働きにより、2009年に宮城歴史資料保全ネットワークの保全活動に位置づけられ、教育委員会の協力を得て資料を保存するシステムが構築されてきた。それでも、調査が終われば原資料を廃棄してしまうといった事例や、逆に新しい資料を破棄するという事態も起こっているそうで、何を残し何を捨てるかという基準を、現場に周知させることの困難さを感じさせた。

講演終了後、東北学院史料館の展示室を見学した。戦前の仙台市内の地図を前に、1945年7月の仙台空襲の被害について説明を受けたことが印象に残る。この場所でも、無差別と言ってもよい爆撃があり、戦争がおわると進駐軍が入ってきたことをリアルに感じる事ができたように思う。



2日目（10月8日）は会場を変え、東北学院大学に集合した。3人のかたの報告を聞く。東北学院史資料センターの川西晃祐氏からは、まず東北学院のルーツである仙台神学校を開設した、押川方義についてうかがった。押川

は受洗後、キリスト教学校を設立しようとするが、東北入りしてきた新島襄に学校設立を譲り、1886年に神学校をつくった。東北学院の学院長を辞したのち、朝鮮半島に教育施設をつくろうとしたが、スキャンダルに巻き込まれてしまう。才気あふれる人物であったのに、その能力に見合った後世の評価を受けることができなかったのだ。次に、東北学院と戦争とのかかわりについて聞いた。前日取り上げられた宮城学院女子大学がそうであったように、東北学院もまた、生き残るために軍と「協調関係」にあったという。学院と軍の共通の敵は、共産主義の学生である。「赤化学生」は反キリスト教的な思想を学内に拡散し、当時同盟休校も度々起こっていたため、学院はこれを鎮めるために軍の手を借りた。仙台師団は学院の現場に介入、共産主義思想を持つ疑いのある学生を取り締まった。以降、師団から、軍に適応しそうな学生の数を尋ねてくるなどの接触を示す資料が残っており、もし戦争が長引いていれば、東北学院の学生の30パーセントが学徒出陣しなくてはならなかった可能性があるという。終戦後は、GHQにドイツ改革派（東北学院の宗教的母体）の有力者がいたこともあり、資金の援助を得て、比較的早くに落ち着きを取り戻すことができた。現在、学院の戦中戦後のことを調査することへのタブー感は、かなり減ってきているとはいえ、軍と協調していたという事実を伏せておきたいという空気は、やはりあるということだ。

九州大学大学文書館の折田悦郎氏からは、九州大学の学徒出陣について、詳細なデータとともに話していただいた。九州大学は医学部があるので、昭和12年から、まず医学部の学生が軍医として戦線に送り出され始めた。昭和16年に、大学生の徴集延期が繰り上げられるようになると、徐々に法文学部の学生の徴集数が多くなる。文系学生が数多く駆り出されたのは、日本全国どここの大学でも同様だった。彼らはもちろん、医学部の学生とは違い、前線でたたかう「兵隊」として徴集されている。また、朝鮮や台湾からの留学生で志願兵となる気が無い者に、休学を命ずるよう通達されていたという記録も残る。しかし九州大学では、出陣する学生たちの壮行会で、「お国のために死ね」といったことを言わず、「自愛の心を忘れるな」と学生たちに語りかけている。学徒出陣がピークになった頃、キャンパスの中には女子学生と留学生、徴兵検査で不合格となった学生しかおらず、閑散となった。大学に残った学生を他の帝国大学に委託したほうが良いのではないかという意見も

出たが、法文学部の教授会は反対し、出征した学生が安心して戻れる大学を維持し、日本西部の文化的中心を担う教育機関として、在学生も責任を持って教育すべきだと意見したという。この辺りに、九州大学の独特の矜持が見て取れるのではないだろうか。

三件目の報告は、慶応義塾福澤研究センターの都倉武之氏より、2013年8月に発足した「慶応義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトについてうかがった。「あの戦争」に対する視点を如何に置くかということの難しさを感じ、例えば呼称ひとつとってもいくつも出てくるし、「終戦記念日」も、日本と世界では認識が違うといったことを、意識せざるを得なかったという。アーカイブの担当者として公平な立場を貫くために、またプロジェクトを、党派性や個人研究の枠を超えたものとするべく、調査を依頼する相手には特に気を遣った。聞き取りでは、非常に多種多様な体験が存在することがわかり、いわゆる特攻のように、「派手」な話に埋もれがちなものも沢山ある。あの時代に生きた人々にとっては「日常」であっても、戦争を知らない者にしてみるとすべてが「戦争体験」である。中には、学徒動員の出陣式に、雨で濡れるのが嫌で参加しなかったというような「サボる」体験や、恋愛など、当事者が語りにくい（今だから語れる）体験もある。収集する資料を自校のものにこだわったのは、最も展示を見てくれる可能性と数が高い学生たちの想像力を喚起し、自分の頭で戦争について考えてほしかったからだという。慶応の学生のデータは、学籍簿・在学証書・成績原簿の3点がセットで、古いOB、OGは「卒業生要録」、他の卒業生は「塾員カード」が資料になる。ご本人とご遺族に連絡が取れた分のみ、名前や出身地を開示しているが、この3点セットを見れば、個人の特定は簡単かもしれないという。資料の収集には、卒業生の協力だけでなく、ネットオークションも利用している。インターネットは、今や古い資料収集に欠かせないコンテンツだという意見には、共感できた。

この後、総括討論がおこなわれ、各報告者への個別の質問や、共通の質問等が公開された。

この日の昼休み、東北学院大学博物館とデフォレスト館、チャペルと東北学院資料センター（ラーハウザー記念東北学院礼拝堂）を見学した。現在博

博物館では、東日本大震災で被災した資料のレスキューを手伝っており、国立民族学博物館に送るために準備されている試料液などを見せていただいた。学芸員課程があるので、実習にも使われるということだ。個人的には、海に沈められていたという「板碑」（大きな石板の、今でいう「卒塔婆」）が印象的だった。仙台を離れる前に立ち寄った瑞鳳殿に、同じものがあったからである。関東より北の地方に独特のものらしい。デフォレスト館は、先の地震で一部の柱にひびが入る等の被害があった。現在は入館できず、近々耐震補強の工事が開始される予定である。資料室はチャペルの地下にあたり、入口がやや狭いのだが、入ると思いがけず奥に広い印象で、ぐるりと見て回るのに、昼休みが終わりそうでやや焦るくらいだった。



3日目（10月9日）は再び東北大学史料館に集合し、2班に分かれて、史料館内と学内の史跡・記念碑を巡った。「魯迅の階段教室」（旧仙台医学専門学校六号教室）も見学した。階段教室は、その建物が重文指定を受けているために、大学内にあるといえどもそこだけ独立した施設といったたたずまいである。中は段差が大きいめの明るい階段教室で、装飾はレトロ感が漂うが使い傷んだ感じは無かった。もちろん、現在教室としては使われていない。史料館では、閲覧室とバックヤードを見学させてもらった。1



日目と2日目で話題にのぼった、東北大学所蔵の大学の公文書を出してもらう。戦時中の紙資料はどれもそうであるように、紙の質が悪いためにぼろぼろになってしまうのだが、東北大学では綴りなら綴りの形態をなるべく保持して管理している。中には、今では考えられないような記述もあるわけだが、それが日常になり、手続きに従って淡々と記録されている感じだ。まだまだ調査が必要な資料もたくさんあるようだ。

(調査研究員)